

OH! 友よ



mikatuki98

そろそろ秋の気配が感じられて来たある夜のこと。ふんふんふん、と鼻歌交じりに階段を上がって来たウニ子は一瞬ハッ！とすると、マリモが入ったガラスの丸っこい金魚鉢が置かれてある台の前で立ち止まった。

ガラスの金魚鉢の側には、黄緑色で縞柄のクマとタンゴと名付けた黒い猫のぬいぐるみが置かれてある。そんな台の上で何かが動くのが目に入った。

「ん？う～ん？……うおおおー！ゴキちゃーん！」

それは紛れも無くゴキブリだった。しかも二匹。仲良く追いかけてこをするかのように金魚鉢の周りを目まぐるしく回っている。歓喜のダンスをしているようにも見える。もしかしたら新婚さんなのかもしれない。昆虫的直感がウニ子にそう思わせた。

「はぁ～ゴキちゃんかぁ…… 久々に現われたなぁ～ しかもペアだよ」

昆虫好きのウニ子には、相変わらず殺すという思考が無い。それはゴキブリであっても同じだ。夏が去り、存在を少し忘れかけていた頃に登場したゴキブリにウニ子は少なからず驚いたが、一般の人々のように極度の拒否反応を抱くことも無く、ふらりと自分の部屋に入って行った。

ところがウニ子は再び布団の前で立ち止まった。なんとウニ子の目に入ったのは、またしてもゴキブリだ。しかも新しく敷き替えたばかりの真っ白なシーツの上をそれは走り回っている。そこがまるで自分の新しい遊び場だと信じ切っているかのように、アッチに行ったりコッチに行ったり、見るからに楽しそうに走り回っている。

「あ～～～ん、そこはウニ子の寝床なんだよお～ もう！あんたの場所じゃないんだからね！」

ゴキブリの行動には慈愛に満ちたブツダのように寛大な心のウニ子も、この時ばかりはさすがに顔が歪んだ。

「どけどけどけーん！ウニ子様の大事な寝床だぁ～～～」

ウニ子はゴキブリを傷付けないようにシーツの上から追い払った。

しかしゴキブリ、いやゴキっちは驚くほどトロイ！お坊ちゃま育ちなのか世間知らずなのか、初めての災難に完全にパニック状態だ。アタフタする様子は見てて妙に可愛らしい。人間に襲われるという経験の無かっただろうゴキっちは、もしかしたら金魚鉢の台に居たペア・ゴキブリの子供なのかもしれない。これもウニ子の昆虫的直感だ。

それにしてもゴキっちは広いシーツの上で右往左往するばかりで、中々シーツの圏外へ脱出できない。

「あ～あ、ドン臭いなあ～」

ウニ子が情けなさそうに見守る中、逃げ惑って疲れ果てたゴキっちは、やっとシーツの海から抜け出し畳の陸へ辿り着くと、トボトボと肩を落としながら物陰に向かって歩いて行った。勿論、これもウニ子のいつもの昆虫的直感で感じ取ったゴキっちの心境だ。今のゴキっちには、一般的に見掛けるススス・サササという動きなど、到底出来はしないのだ。

「ごめんね……ゴキっち。何だか可哀想なことしちゃったかな……」

この夜、ウニ子は秋の虫の音も手伝ってか、チョッピリ感傷的な気分になった。

ウニ子が”ゴキっちファミリー”と名付けたあの夜に出逢った3匹のゴキブリは、あのままウニ子の部屋に棲みついたのかどうか、あれ以来全く姿を見ない。そんな秋も大分深まって来たある日のこと。休日だったその日はいつもより遅い朝食を済ませると、ふんふんふん、といつものように鼻歌交じりに階段を上ったウニ子はワサビの部屋へ入った。

ワサビの部屋は弟アガリの趣味で全体がキミドリ色に統一されているのでそう呼んでいるが、弟アガリはしばらく冒険の旅に行く！と言って出て行ったきりもう1年は帰って来ない。家を出る前に、ボクの部屋は自由に使ってもいいよ、と言っていたから当分帰ってくるつもりは無いらしい。

ウニ子は自分の部屋が狭かったのでこれ幸いとばかりに、ワサビの部屋をすっかり自分の部屋のように使っていた。そんなワサビの部屋にはイラストを趣味で描いていた弟アガリの広めの机があり、ウニ子は其処に自分のノートパソコンを持ち込み、知的生産に従事できる空間を作っている。ウニ子の部屋が主に寝る為の静の部屋に対して、ワサビの部屋は何かを生産する為の動の部屋という訳だ。

「さてと……今から何をしようかな」

と、机の前に立ったウニ子の身体が瞬間、硬直した。そして3秒後に感嘆の声を上げた。

「うおおおおおー！遂に現れたかあ———！」

なんと机の上には、懐かしいあのゴキっちの姿があるではないか。こいつはあの日、シーツの上ではしゃぎ回っていたゴキっちに違い無い、とウニ子の昆虫的直感が働いた。

しかしいつもなら、元気にしていたのかい？ と優しい声の一つも掛けるウニ子だが、さすがに机の上いきなり登場されたとなるとあまり歓迎する気にはなれない。いや、何処だったら喜んで受け入れるというもの訳でもないが、姿を見掛ければ、ゴキブリも昆虫の端くれ、やあ元気かい？くらいの友好条約は結んでいるつもりだ。

ただウニ子にとって机の上というのは部屋の中でも特に、神聖視している場所なのだ。そこへ昼間っから堂々と居座られるとなると、仏のウニ子も鬼とならざるを得ない。

「ちょっとちょっと、そこどいてよね！」

ウニ子は机の上を指の腹でトントンと叩き、ゴキっちに自主的なご移動を促した。が、反応が鈍い。と言うかビクとも動かない。やはりあの夜のゴキっちに違い無い。仕方なくもう一度トントンと、さっきよりもゴキっちの身体に近い机の上を指の腹で叩いた。

するとやっと人間が側に居ることに気付いたのか、ハッ！として慌てて隠れた……つもりだったのだろう。なんとゴキっちが隠したのは長い触角と頭の先っちょだけ。しかも其処は弟アガリが絵に使っていたペン類を立ててある、2個の大きなマグカップの間だ。半分以上は隠し切れていないゴキっちの存在は、ウニ子から見れば完全に丸見えなのだ。

「何々？キミってそれで隠れたつもりなの？あのねえ～お尻が丸見えなんですけど……」

ゴキっちの逃げた距離は僅かに30センチ。あまりにもお間抜けな逃走劇にウニ子は可笑しくて堪らない。もう怒る気にもなれない。ウニ子はゴキっちの様子をしばらく伺っていたが、ゴキ

っちはゴキっちで隠れたつもりのその体勢でジッとしたまま一向に動く気配が無い。とうとうウニ子は机の上からゴキっちを追い払うことを諦めた。そしてノートとペンを持ち、テレビの前に据えられた小さなテーブルを机代わりに、お昼のひとときの知的生産に従事したのだった。

頭隠して尻隠さず。今やウニ子にとっては、友と呼んでいいほどに間抜けっぷりが魅力のゴキっち。その彼のパパとママは既に死んでしまったのか、たまに彼一匹だけで現れるようになっていた。

そんなある夜のこと。ウニ子がワサビの部屋のエアコンにスイッチを入れようと東を向き、リモコンを持った右手をエアコンに向けて伸ばした。と、その時、エアコンから右斜め30センチの場所に、昨日は無かったシミがあるのに気が付いた。

「ん～？」

ウニ子は首を伸ばし、目を凝らしてシミの実体を確かめた。結果、初めはまかさね～と思っていたウニ子だが、それは紛れも無くゴキっちだった。

「なんとまあ壁にへばり付いちゃって……ねえゴキっち、今日は一体何をしているの？」

ウニ子はしばらくゴキっちの様子を観察することにした。すると、ウニ子がエアコンのスイッチを入れると同時に、ゴキっちが壁沿いを徐々に移動し始めた。どうもエアコンの方へ向って歩いているらしい。

ところが当然の如くエアコンからは温風が吹き出し、ゴキっちの身体が時折心わりと浮いて飛ばされそうになる。それでも目の前に立ちはだかる困難に挑む冒険者のように、逆温風の中をジワリジワリとエアコンに接近し続けている。

「ななな……ゴキっち、頑張ってるな！」

そんなゴキっちの様子を見たウニ子もゴキっちに負けじと、残業を切り上げて会社から持ち帰った書類をチェックし始めた。しかしゴキっちのことが気になるウニ子。時折壁を見上げてはゴキっちと書類を交互にチェックしていた。

そして遂に！ゴキच्छはエアコンの吹き出し口の真下へ辿り着いて止まった……と思ったが、彼は更に移動している。

「むむむ……一体キミは何処を目指しているのかね？」

ウニ子の問いかけを知ってか知らずか、ゴキच्छは黙々とただひたすら、一歩ずつ前進し続けている。そして地道な歩みの末、エアコンの真下に広がる強温風域を通り抜け無事に横断すると、遂に彼は洋服タンスに突き当たった。

もうそこまで辿り着くとウニ子はそれからのゴキच्छの動向が気になって仕方がない。最早会社の書類をチェックするどころではない。

「さあ、この後どうする！？」

ウニ子はゴキच्छから完全に目が離せなくなった。息を呑んでゴキच्छを見詰めるウニ子。ウニ子に見つめられるゴキच्छ。そしてウニ子の昆虫的直感で友と友の息がピタッと合ったような気がした瞬間、彼は壁から洋服タンスの側面へ移った。

「おおーそう来たか！？」

でこぼこのシートが貼られた壁より滑りやすい素材の洋服タンスの側面だ。ゴキच्छを心配そうに見守るウニ子。ゴキच्छが移動した場所から20センチ程下には金縁の額が掛かっていて、

額の中には弟アガリが描いたアルパカのイラストが飾られてある。

「さあ、どうする!？」

するとゴキッチは、洋服タンスの側面を額の方へ向って下り始めた。頭を下にしてジリジリと移動するゴキッチ。ウニ子にはロッククライミングの逆バージョンを見ている心境だ。

「気をつけて！」

ウニ子がこんなにハラハラドキドキさせられるのは、ゴキブリの中でもゴキッチが初めてだ。そんなゴキッチにとって僅か20センチの移動がどれほど長く感じられていることだろう。しかし当のウニ子には何分経過したのかなんて分からない。それほど集中してゴキッチを観ていた。

そして遂にゴキッチが額に辿り着いた!と思ったら、彼は幅1・5センチの金の縁に乗った。と同時に動きもピタリと止まってしまった。……動かない。

「……そうか!ゴキッチ、キミは頭がいい!其処がベストポジションなんだね」

ウニ子がエアコンのスイッチを入れる頃を見計らい、壁に現れたゴキッチ。暖房の温風を実際に浴びつつも風力は強すぎず、ほんわかと暖かい正に極楽とも言える場所を探し当てたゴキッチ。彼の一連の行動とその結末にウニ子も感動するばかり。しばらく感嘆の余韻に浸っていた。

その後ゴキッチはウニ子が会社の書類のチェックを終えても、ずっと極楽スポットに納まっていた。多分、そのまま朝を迎えるのだろう。

「おやすみゴキッチ! いい夢を……」

その夜、ウニ子もいつになく心地よい眠りに就いたのだった。 了